

YUN-KANG
雲岡石窟續補
第十八洞實測圖

京都大學人文科學研究所

1975

YUN-KANG

雲岡石窟續補第十八洞實測圖

PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO

YUN-KANG

PLANS OF CAVE XVIII

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE
FIFTH CENTURY A. D. IN NORTH CHINA

SURVEYED 1938-45

MEASURING	Dr. Seiichi MIZUNO
AND DRAWING	PROFESSOR OF KYOTO UNIVERSITY

Shigeo TANAKA
LECTURER OF KYOTO UNIVERSITY

TEXT	Dr. Takeo HIBINO
	PROFESSOR OF KYOTO UNIVERSITY

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO

—THE RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANISTIC STUDIES—

KYOTO UNIVERSITY

1 9 7 5

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

續補

第十八洞實測圖

西曆五世紀における中國北部の佛教窟院

調査期間 昭和十三年—昭和二十年

實測・製圖 水野清一
田中重雄

解説 日比野丈夫

京都大學人文科學研究所

1975

PLANS OF CAVE XVIII

PLATE

- I HORIZONTAL SECTION CAVE XVIII
- II VERTICAL SECTION (Seen from East)
- III VERTICAL SECTION (Seen from West)
- IV ELEVATION OF SOUTH WALL
- V ELEVATION OF EAST WALL
- VI ELEVATION OF WEST WALL
- VII ELEVATION OF NORTH WALL
- VIII I VERTICAL SECTION (Seen from North), II CEILING
III PLAN OF WINDOW FLOOR, IIIA VERTICAL SECTION
- IX I NORTH WALL, HEAD OF MAIN STANDING BUDDHA (from West),
IA (Front)
- X I NORTH WALL, LEFT ATTENDANT BODHISATTVA, UPPER PART (from West),
IA (from South)
- XI I WEST WALL, HEAD OF RIGHT ATTENDANT BUDDHA (from South),
IA RIGHT HAND (from East), IB (from North)
II EAST WALL, HEAD OF LEFT ATTENDANT BUDDHA (from West),
IIA RIGHT HAND (from West), IIB (from South)
- XII I NORTH WALL, LEFT HAND OF MAIN STANDING BUDDHA (from West), IA (from South)
II SOUTH WALL, WEST LOWER PART, STANDING BUDDHA
- XIII I NORTH WALL, EAST PART, GREAT DISCIPLE 3 (from West), IA (from South)
II NORTH WALL, EAST PART, GREAT DISCIPLE 2 (from West), IIA (from South)
- XIV I NORTH WALL, EAST PART, GREAT DISCIPLE 4 (from West), IA (from South)
II NORTH WALL, EAST PART, GREAT DISCIPLE 5 (from West), IIA (from South)
III NORTH WALL, EAST PART, GREAT DISCIPLE 1 (from West), IIIA (from South)

FIGURES

Fig. 1	GENERAL VIEW OF YÜN-KANG CAVES	p. 2, 3
Fig. 2	PLANS OF YÜN-KANG CAVES	2, 3
Fig. 3	CAVE XVIII, OUTSIDE WALL	4
Fig. 4	ENTRANCE GATEWAY, EAST REVEAL	5
Fig. 5	ORIGINAL DRAWING, WEST WALL, UPPER PART AND LOWER PART	6
Fig. 6	ORIGINAL DRAWING, SOUTH WALL, UPPER PART AND LOWER PART	7
Fig. 7	NORTH WALL, MAIN STANDING BUDDHA	8
Fig. 8	NORTH WALL, EAST PART	9
Fig. 9	WEST WALL, LOWER PART	10
Fig. 10	SOUTH WALL, WEST PART	11

第十八洞實測圖目次

測圖	
I	横 斷 面 圖
II	縦 斷 面 圖 (東より)
III	縦 斷 面 圖 (西より)
IV	南 壁 立 面 圖
V	東 壁 立 面 圖
VI	西 壁 立 面 圖
VII	北 壁 立 面 圖
VIII	I 縦断面圖(北より), II 天井圖, III 明窓床平面圖, IIIA 同断面圖
IX	I 北壁本尊佛立像 頭部(西より), IA (正面)
X	I 北壁左脇菩薩 上身(西より), IA (南より)
XI	I 西壁右脇佛 頭部(南より), IA 右手(東より), IB (北より) II 東壁左脇佛 頭部(西より), IIA 右手(西より), IIB (南より)
XII	I 北壁本尊佛立像 左手(西より), IA (南より) II 南壁西部下層 佛立像
XIII	I 北壁東部 大弟子3(西より), IA (南より) II 北壁東部 大弟子2(西より), IIA (南より)
XIV	I 北壁東部 大弟子4(西より), IA (南より) II 北壁東部 大弟子5(西より), IIA (南より) III 北壁東部 大弟子1(西より), IIIA (南より)

挿 圖 目 次

		頁
第一圖	雲岡石窟全景	2, 3
第二圖	石窟配置圖	2, 3
第三圖	第十八洞外壁	4
第四圖	門口東側	5
第五圖	實測原圖 西壁上, 下部	6
第六圖	實測原圖 南壁東半上, 下部	7
第七圖	北壁本尊佛立像	8
第八圖	北壁東部	9
第九圖	西壁下部	10
第十圖	南壁西部	11

例 言

1. この雲岡石窟第 18 洞實測圖は、水野清一・田中重雄兩氏が昭和 16 年から 5 年がかりで製作した原圖を、田中氏が整理のうえ淨寫したものである。
2. その原圖は、昭和 20 年の終戦にさいし田中氏が北京に残してきたのを、昭和 32 年水野氏が北京で中國科學院長郭沫若氏から返却されたのである。
3. この實測圖を「雲岡石窟」の續補と名づけたのは、上のような事情で昭和 29 年刊行の第 12 卷（第 17 洞，第 18 洞）にも，昭和 31 年刊行の第 16 卷（補遺）にも收録することができなかったからである。
4. 實測圖の説明に併せて，その製作過程や，第 18 洞が雲岡石窟全體の中に占める地位などについては，日比野丈夫が解説した。日比野は調査當時の關係者として田中氏を除けば，東方文化研究所以來の唯一人の現職者だからである。
5. 終りに附した英文は，この實測圖が出版されるにいたった經過をのべた第 1 章の要約である。譯者 Alfreda Murck 女史はアメリカのプリンストン大學大學院東洋美術史學科の出身で，現在京都大學人文科學研究所の研修員である。

解 説 目 次

	頁
第一章 第十八洞實測圖について	I
第二章 第十八洞の概觀	4
第三章 實測圖の説明	15
THE DRAWINGS OF CAVE XVIII	21

第一章 第十八洞實測圖について

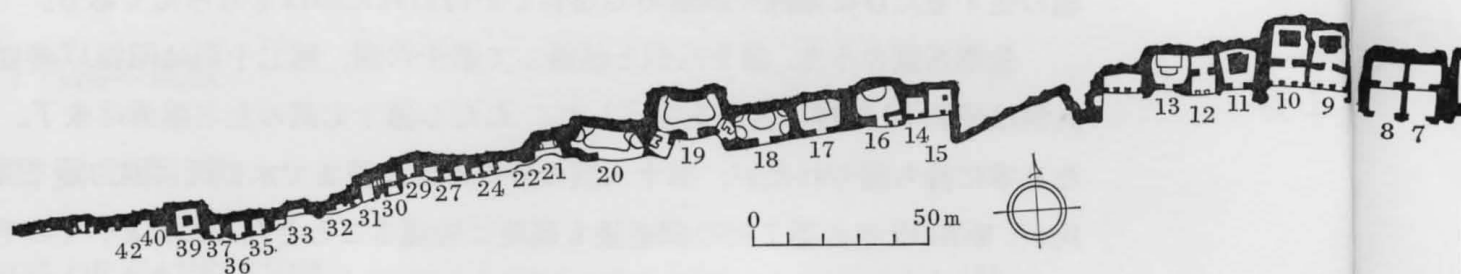
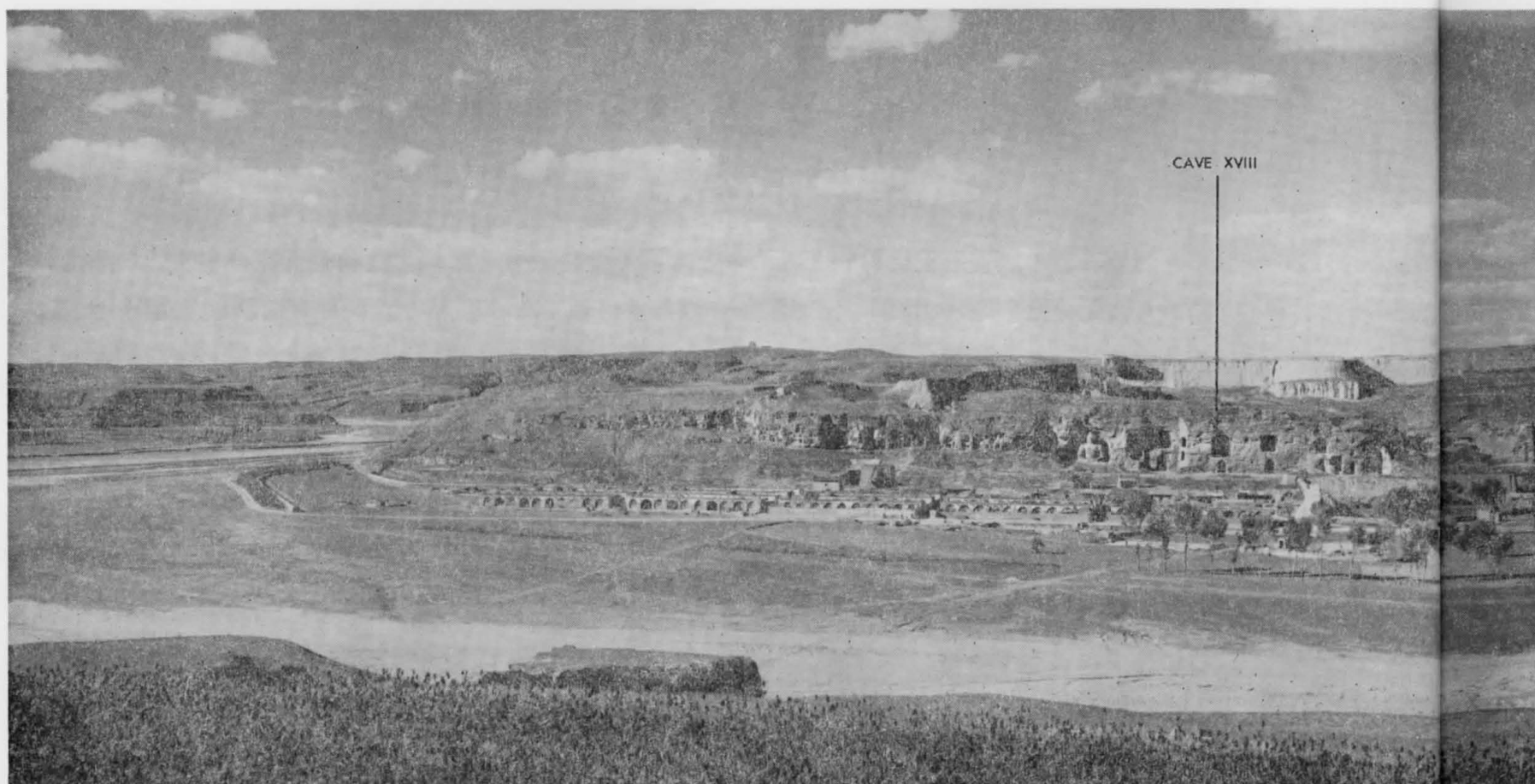
雲岡石窟の調査過程において、もっとも古くかつもっとも雄大な曇曜五窟の本格的な測量が始められたのは、昭和16年の第4回調査のときからである。第十六洞は鹽田義秋、第十七洞は故鈴木義孝、第十八洞は故水野清一、第十九洞は北野正男、第二十洞は長廣敏雄の諸氏が主として擔當した。同年の6月27日まずこの五窟の共通水平基準をつくる作業から始め、7月1日には第十八洞の基準線を設定して、5日からいよいよ實測にとりかかった。平面圖の作成は初め水野氏が鹽田氏の協力を得て行ったが、のちには獨力でこれに當り、7月14日に一應完了。引續いて翌日から壁面の實測を始め、北壁、西壁、東壁の順序で進められ、8月末からは岡崎卯一氏が加わって南壁の實測を行った。9月に入ると拱門や明窓の測量にも手をつけ、明窓の實測は11日ごろに終つたようである。

昭和17年の第5回調査は7月4日から始められ、昨年の繼續として東壁、南壁を實測。7月末には田中重雄（當時の姓は高柳）氏が参加して北壁の全面に及び、8月1日にはついに本尊の實測に着手した。かくして水野、田中兩氏の共同作業は9月22日まで續けられて、第十八洞の實測は終了を告げた。この實測の結果を整理する作業も平行して進められていたのであって、問題の生ずるたびに補測や測量のしなおしが行われたのはもちろんである。

曇曜五窟のうち、第十八洞と前後して第十六洞、第二十洞は昭和17年度に、第十七洞、第十九洞は昭和18年度に實測を完了した。ただし第十七洞の左右脇佛は未了。それらの實測圖はみな日本に持ち歸られたが、第十八洞の分だけは最後まで水野氏に協力して實測に當つた田中重雄氏が、昭和19年の第7回の調査後も現地に居残ることとなったため、その手もとにおかれたのである。いうまでもなく、第十八洞の實測は水野氏がもっとも力を注いだもので、これが整理、淨寫を現地の田中氏に託して完璧を期そうとしたからであつた。しかし、昭和19年の第7回調査はついに最後の調査となり、翌20年8月には不幸にも終戦を迎えた。

田中氏は終戦時の混亂の中を雲岡と大同との間を往復して、ようやく實測圖を取り出し、身の廻りの荷物とともに、大同から石太線回りの引き上げ列車に乗りこんだのが9月1日。10月4日に太原にたどりつき、石家莊をへて北京近くの豊台まできたのが10月の末であつた。ここで實測圖が身の廻りの荷物とともに貨車に積まれたまま太原に残されていることがわかつたので、決死の覺悟で太原にもどり、かろうじてこれをさがし出し豊台に引き返してきたときは、すでに12月18日だつたという。こうして非常な苦心のすえ北京まで持ってきた實測圖も、國外への帶出は許されず、これを残したまま田中氏は塘沽から引き上げ船に乗らねばならなかつた。

その後これらの實測圖は、中國政府に接收されたということで、もはや手に入らないものとあきらめられていた。従つて、昭和26年から31年にかけて出版された水野・長廣兩氏の研究報



告『雲岡石窟』の中にも、第12巻に第十八洞の測量圖は「敗戦の際に亡失した」として、わずかに横断面圖一葉が収められているに過ぎない。

ところが昭和32年、水野氏が故原田淑人氏を團長とする訪中考古學視察團に加わって北京をおとずれたさい、中國科學院において郭沫若院長から、第十八洞の實測圖を返還されたのである。十餘年にわたり、おそらく夢寐の間もこの圖のことを忘れえなかった水野氏には、感きわまるものがあつたであろう。實はこれよりさき昭和30年の末、日本學術會議の招待によって、郭沫若氏以下15名の中國の學者が來日したさい、京都において水野氏は郭氏に對し、この實測圖の所在確認を懇請したことがあつた。郭氏はそのときの水野氏の熱意を忘れず、これにこたえられたのであつて、關係者も進んで協力されたと聞いている。

それから14年、水野氏は昭和46年に病氣のため世を去つたのであるが、生前この實測圖はつ

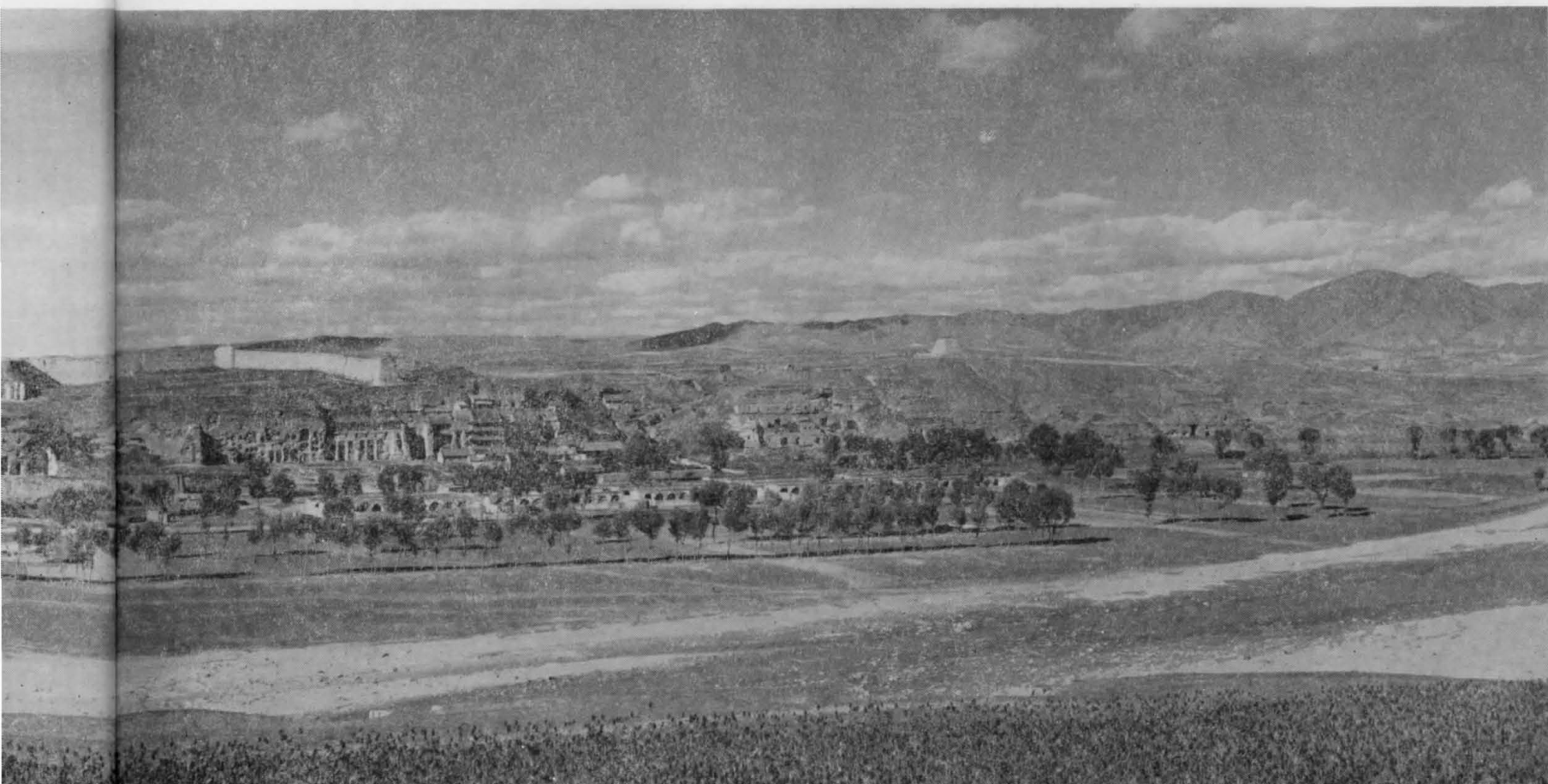


Fig. 1 General View of Yün-kang Caves 第一圖 雲岡全景

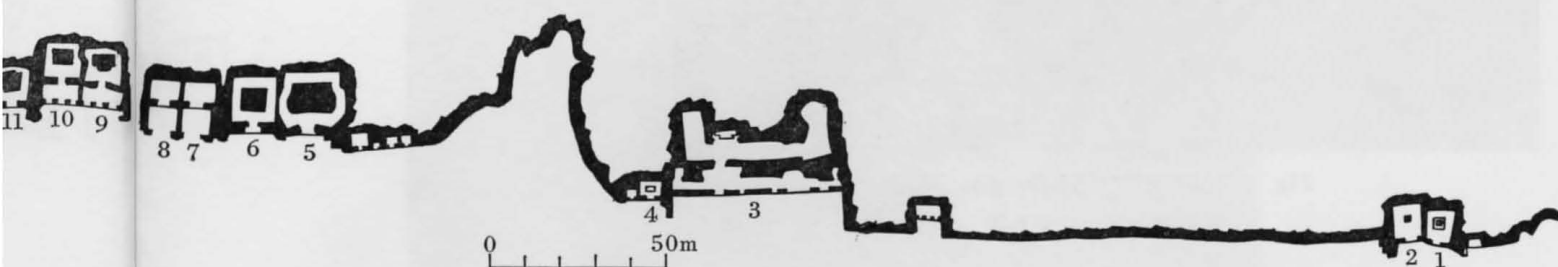


Fig. 2 Plan of Yün-kang Caves 第二圖 雲岡石窟配置圖

いにいかなる形においても発表されなかった。昭和48年その三周忌を記念して出版された『水野清一博士追憶集』の中に、鉛筆がきの原圖四葉が圖版として挿入されたのが初めてである。それが田中氏の努力によって、このように立派に整理、淨寫され『雲岡石窟』續補冊として出版されることとなった。この調査の價值を認めて實測圖を返して下さった郭沫若氏をはじめ、中國科學院の方々の厚意に報いるとともに、日中兩國の學術交流のためにいささかでも寄與することができるとすれば、このうえない喜びといわねばならない。

思えば、雲岡の第1回調査いらい今年で37年になる。現地調査に関係した一員として今もなお同じ研究所に籍をおいているのは、田中氏をのぞけばわたくし一人しか残っていない。この解説の筆をわたくしがとるようになったのも、こうした因縁からである。

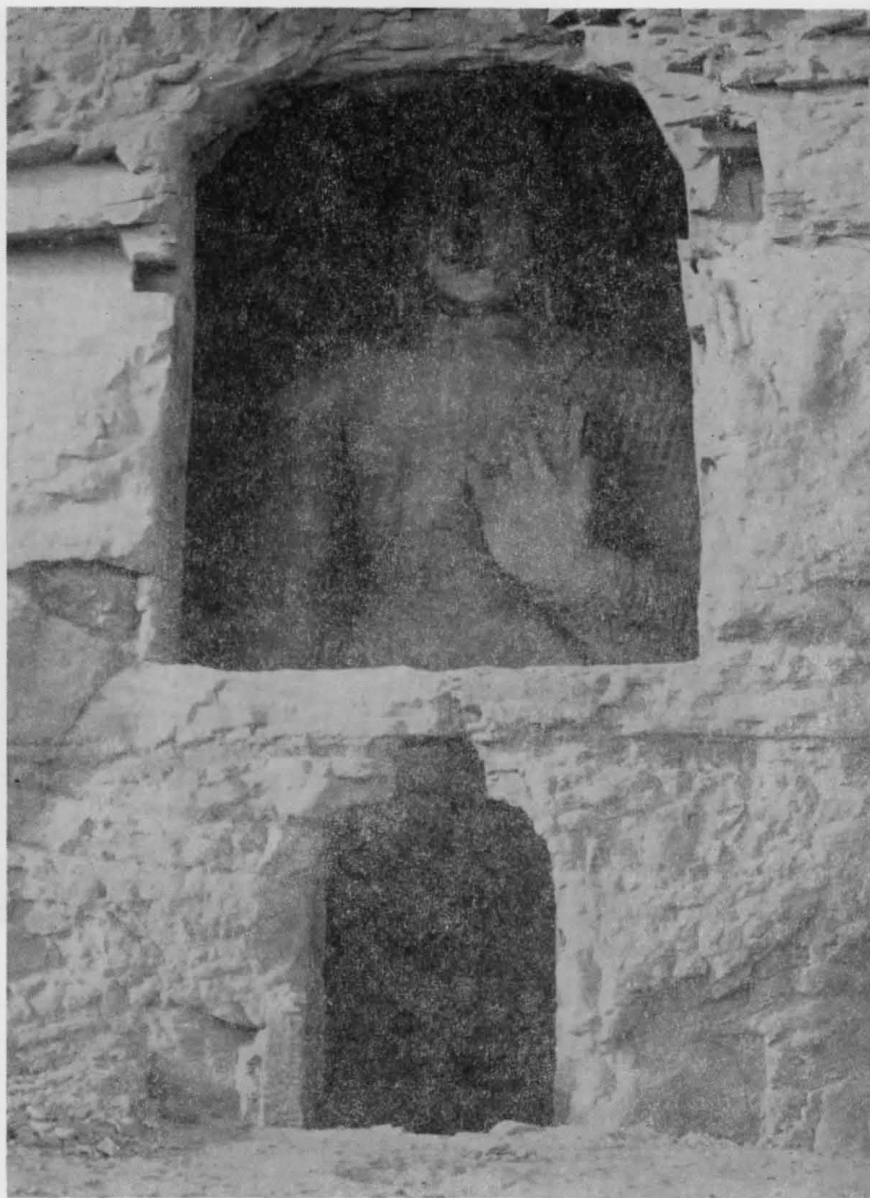


Fig. 3 CAVE XVIII Outside Wall

第三圖 第十八洞外壁

第二章 第十八洞の概観

雲岡石窟の中心部は武州川の北岸約 1 km にわたり、二つの小さい谷によって東方、中央、西方の 3 群に分かれている。3 群を通じて主要な石窟は 42、東方群は第一洞から第四洞まで、中央群は第五洞から第十三洞まで、西方群は第十四洞から第四十二洞までである。第十八洞は第十六洞から第二十洞にいたる、いわゆる曇曜五窟の一つであって、西方群の東部に位置する。ことあたらしくいうまでもないが、この五窟は曇曜によって開かれた雲岡最古の石窟で、数多い石窟中でもきわだって壯大であり、中に刻し出されたそれぞれの本尊もみな 15 m を上下する雄渾な巨像である。

曇曜の雲岡石窟の開鑿は西暦 460 年代の初期から始められたもので、北魏第四代の文成帝に

よる佛教復興の最大事業の一つであった。帝は祖父にあたる第三代の太武帝がとった排佛政策をくつがえし、復佛を斷行するが、その先頭に立って活躍したのが曇曜なのである。かれは沙門統と稱する、佛教行政の長官ともいべき職に任ぜられると、文成帝に向って雲岡の巖壁に五窟を開き、大石佛をつくって北魏の五皇帝になぞらえたいと申し出た。五皇帝とは第一代の太祖道武帝、第二代の太宗明元帝、第三代の世祖太武帝、つぎが太子のままで世を去り帝位にはつかなかったが、恭宗景穆帝とおくり名された文成帝の父、そのつぎが現在の皇帝であった第四代の高宗文成帝その人である。過去の四帝の冥福を祈り、當今の皇帝の功德を積むためのものであれば、その計畫に反對するものがあつたらうとは思われない。

しかし、その開鑿がいつから始められ、いつに終つたかということは明らかでないのである。また五窟の本尊がそれぞれどの皇帝になぞらえられているかということもわからない。第十六洞の本尊は波狀の頭髮をもち大きな蓮華臺座の上に立つ佛の立像。第十七洞の本尊は頭上に寶冠をいただいた交脚の彌勒菩薩像。第十八洞の本尊は、第十六洞に比べてひととき雄大な蓮華臺座上

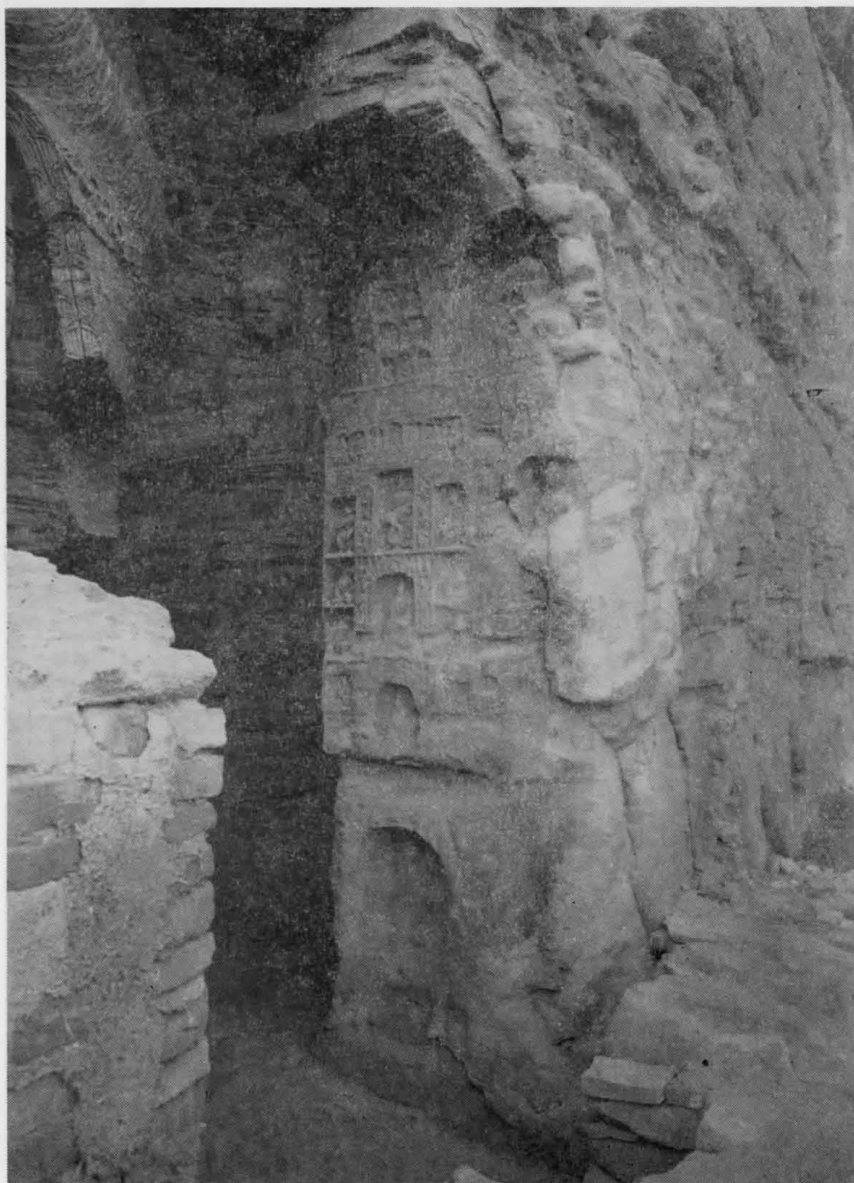


Fig. 4 Entrance Gateway/
East Reveal

第四圖 門口東側



Fig. 5 Original Drawing, West Wall, Upper Part and Lower Part
第五圖 實測原圖 西壁上, 下部

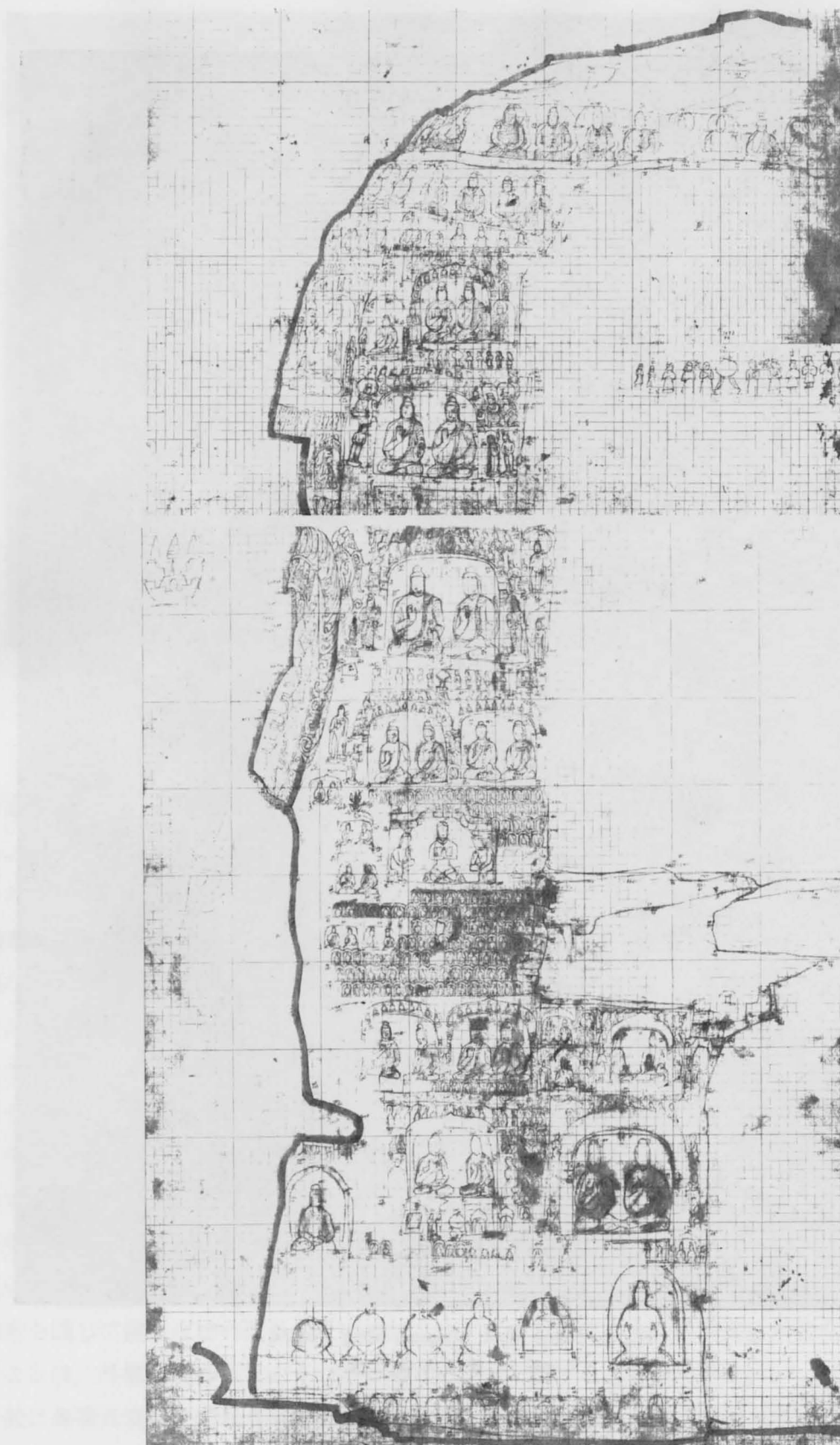


Fig. 6 Original Drawing, South Wall, Upper Part and Lower Part
第六圖 實測原圖 南壁東半上部, 下部

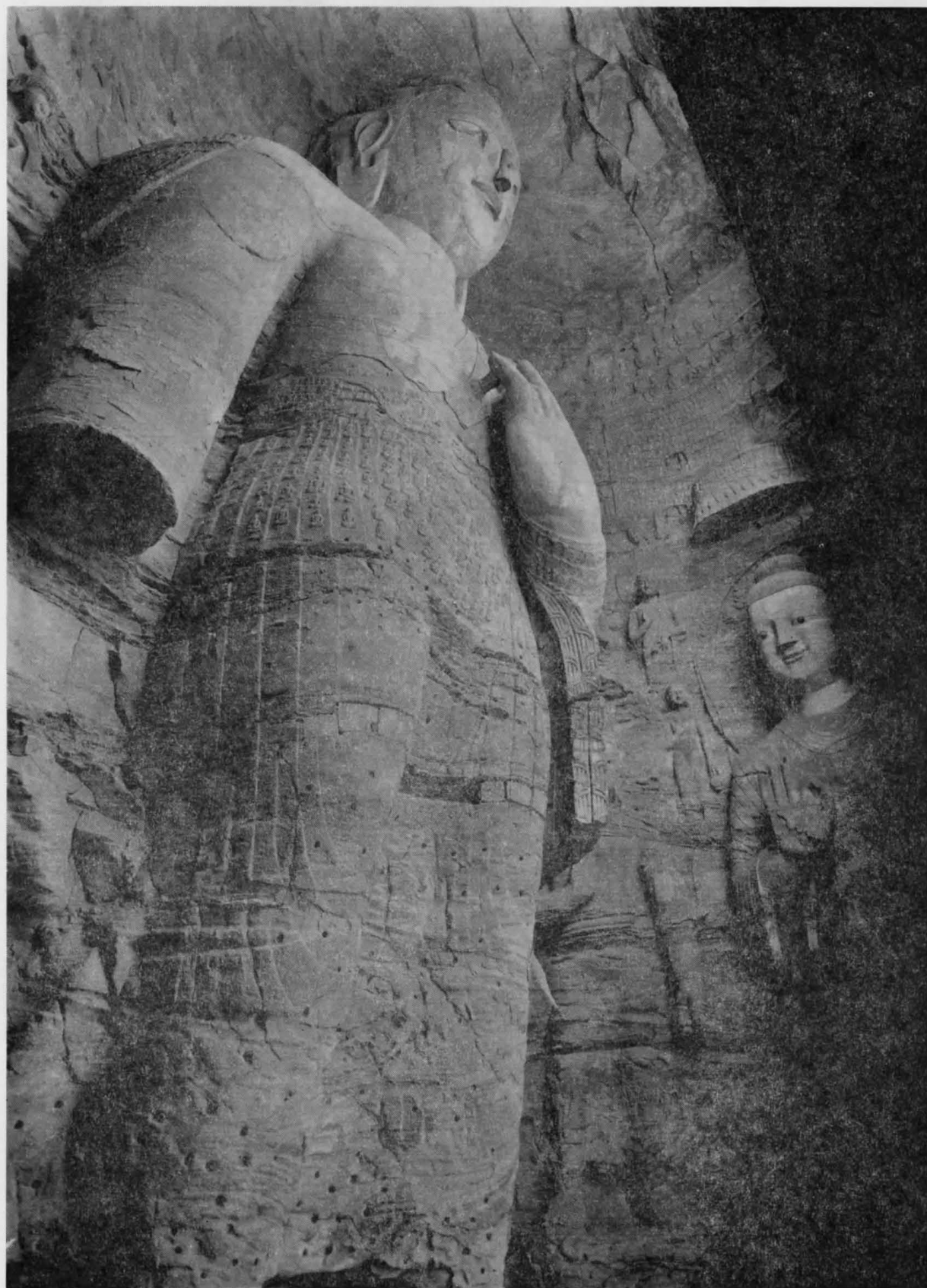


Fig. 7 North Wall, Main Standing Buddha
第七圖 北壁本尊佛立像



Fig. 8 North Wall, East Part

第八圖 北壁東部

の佛の立像。第十九洞の本尊は佛の結跏趺坐像で雲岡最大、しかもこの洞は左右に脇洞をひかえている。第二十洞の本尊が有名な露佛でやはり結跏趺坐、もともと他と同じように洞窟内に刻されていたのが、天井と前壁とが落下してしまったのである。これらの巨像はみな洞窟の中いっばいに刻され、周壁との空間はきわめて少ない。第十七洞の交脚菩薩像の寶冠のごときは、直接天井に連なっているのである。従って、どの本尊も窟内に立って像の全體を仰ぎ見ることは困難であって、その量感にはまったく壓倒されるほかはない。ことに第十八洞は五窟の中でも古い様式をもっていることから、釋迦佛と考えられるその雄大無比な本尊を文成帝にあてる人もあるが、もとより想像にすぎないであろう。

さて第十八洞は外からみると、中央地上に長方形の門口がつけられ、その上には門口よりも遙かに大きな正方形の明窓が開かれている。入口をはいれば、まず正面に立ちはだかる巨大な本尊の下半身に向かうのであって、前面のゆとりがないために仰いでまともにその顔を見ることができない。顔を真正面から見ようとすれば、石窟から遙か南に離れ、やや小高くなった土山の上から明窓を通して眺めなければならないのである。この石窟にももとは前面に木造の樓閣建築があったことは、外壁に残されたいくつかの梁穴によって察することができる。

一般に曇曜五窟はいずれも本尊が主體で裝飾は少なく、第十六洞、第十七洞のごとく周壁にはただ千佛龕を列ねるといったふうで、どこまでも本尊を大きく引き立たせることを主眼としている。しかし、この第十八洞では本尊の左右に一對の大きな脇佛立像をひかえさせ、本尊と脇佛



Fig. 9 West Wall, Lower Part
第九圖 西壁下部

との間にはそれぞれやや小型の菩薩像を配する。表情に乏しく威厳に満ちた本尊に比べ、これらの脇佛や菩薩は慈愛あふれる圓滿の相をもって、なごやかな気分をかもし出してくれる。そればかりではなく、菩薩像の背後には左右5體づつ、釋迦の十大弟子と考えられる比丘像が個性豊かな表現をもって刻し出されているのである。さらにその背景には供養天人の浮彫りが列んでいるのであって、第十八洞は五窟の中ではもっとも構造美に富んだ、華麗な特徴を備えたものといえてよい。

ところで、曇曜五窟が果して同時に着工されたかどうかは疑問であって、窟相互の間には明らかに年代の差が認められる。五窟の開鑿は古いものからいって、第十九洞、第十八洞、第十七洞、第二十洞、第十六洞の順序になるようである。初めの三窟はその様式が古いだけでなく、いずれも本尊が堂々として大きく、それぞれに特徴をもっていて雲岡初期の代表的石窟としての貫祿を十分に示している。第十六洞がもっとも新しいとせられるのは、他の窟に比べて空間のわりに本尊が細手で量感に乏しいこと、頭髮が波状で衣紋の平行線をなしていることなど龍門様式に近いからである。第二十洞も、その本尊の相貌のあまりにも端正で、それだけに迫力に缺ける



Fig. 10 South Wall, West Part
第十圖 南壁西部

ことが、他の三窟より時代の新しさを感じさせるという。しかし、もっとも古いとされる第十九洞にしても、その兩脇洞は決して同年代のものとは思われず、西脇洞の方が東脇洞に比べて明らかに新しい様式を示しているのである。

あるいは第十七洞本尊の足が未完成で、初めに刻された足の上に第二の足が刻されていること、しかもそれが前者に比べて遙かに出来の悪いものであることも明らかにされた。またこの窟の明窓の東側には489年（太和13年）の年記のある造像銘が刻されていて、この窟が着工以来、30年近くにわたって営み続けられていたことをものがたる。このことは曇曜五窟の全般にわたってもいいうるであろう。文成帝ののち、その子の顯祖獻文帝をへて高祖孝文帝が立つが、孝文帝は494年（太和18年）祖先以来の都であった平城をすてて洛陽に移った。しかし、その後も雲岡石窟の造営は、平城に居残った貴族たちによって引続き行われていたものと考えられる。

それでは、曇曜五窟とそれ以外の石窟との関係はどうか。五窟と年代的にもっとも近い様式を示しているのは、中央群の第七洞、第八洞の一対の石窟である。これは五窟のごとき一窟一尊形式とはことなり、建築的に構成された多くの佛龕の中に、佛、菩薩、天人を無数に刻し出して

いる。それぞれの形こそ小さいが量感に富んだ豊満な様相からして、この一對の窟は曇曜の五窟よりは少し遅れて、あるいは殆んど同時に開かれたものであろうという。これについて開かれたのが、第八洞、第九洞であって、つぎにきたる第五洞、第六洞への過渡期をなすものである。第五、第六の兩洞は雲岡石佛寺の中心をなす部分で、窟前には後世のものではあるが、それぞれ四層の樓閣を構えている。第五洞は高さ 15 m を越える佛の結跏趺坐像を本尊とし、第六洞は中央にストーパーをかたどった方柱を彫り残した塔窟である。この一對の石窟は数多い雲岡の石窟中でも、技法といい形式といい、すべてが最高潮に達した時代のもっとも華麗なものであって、孝文帝の洛陽に都を移す直前の造営といわれる。第五洞は孝文帝が父の獻文帝の冥福のためにつくったのであろうという説があるのも、あながちいわれのないことではない。

様式からみて、東方群の第一洞、第二洞は第五、第六兩洞と時を同じくし、第三洞はおそらく洛陽遷都にさいし未完成のまま取り残されたものではないか。中央群の第十一洞、第十二洞、第十三洞は第九、第十兩洞に續いて、第五、第六兩洞と同じころにできあがったであろうと考えられている。これらに續くのが、西方群の第十四洞、第十五洞と第二十一洞以下の諸窟であるが、その大部分は、東方群の第四洞とともに洛陽遷都後の造営とみた方がよいという。

つぎに曇曜五窟についての故水野清一氏の手記を移録し、その中から第十八洞の一斑をうかがうことにしよう。これは昭和 16 年の調査日記の一部で、未発表のものである。

さて曇曜五窟は、昨年度において徹底的清掃作業がおこなわれていたため簡単に掃除をおこない、基準線を正確にきめることさえできれば、あとは機械的な測量操作をつづけるのみである。もっとも、これは原則だけで、實地に運用する困難はまた別である。洞の構造が複雑かつ巨大であること、足場上の作業であることも、われわれにとってはにがてである。

さて、どういうふうに圖面をとるのかであるが、これには、いろいろの意見があっても、われわれは正面の本尊を中心にして東西南北一面づつの立面圖をとる方針をたてた。これは昭和 11 年、響堂山石窟、龍門石窟の調査以來、そうしているのである。雲岡では遺跡地が大體南面しているから、北壁圖が正面をしめす圖となるわけである。曇曜五窟は彫像本位で建築的ではなく、きわめて不整形であって、これを四つの壁面圖にまとめるには、いろいろ困難をともなった。また浮彫とはいっても、ほとんど丸彫のごとく突出している彫像のことであるから、これを平面的な圖面のうえに投影するためには、正確な碁盤縞の基準線を空間内に想定せねばならないわけである。壁畫の模寫にも同様な碁盤縞の基準線をかंगाえる。が雲岡のばあいにはこの原理は簡単だが、原理の實地應用ということは容易でないのである。しかし、このようにしてできあがった圖面は、彫刻品に對する設計圖にほかならないのであって、完成せられたあかつきには、もっとも客觀的な雲岡石窟の記録となるだろう。寫眞ではそうはいかない。寫眞は光線の効果のうえになりたつものだから、立體觀、遠近觀、擴大縮少を、寫眞一流のメカニズムでつくりあげるのである。ただ圖面のものは設計圖にすぎないから、實物のしめす印象や光線による効果を記録できない。ここに測圖と寫眞とのおのおの独自の役目が存するという

ことができよう。

調査員が同音にいうことは、くる年ごとに雲岡に對する感銘—あるいは認識—をあらためられるということである。それは東より西にかけて、つぎつぎと20の洞窟が測量され撮影され、それぞれの特色が比較のうへにおいて明らかにされたことによる。ここに曇曜五窟を微にいり細にわたって調査した結果は、また雲岡石窟觀をふかめずにはいられない。いうまでもなく、五窟は雲岡でもっともふるい營造にかかり、もっとも雲岡を代表する傑作である。なかんづく第十九洞はその規模の壯大さにおいて、全窟を通じその比をみぬところであり、また營造精神においても、壓倒的な効果を人にあたえるものがある。本洞を南北につらぬく基準線をかんがえ、つぎに東西兩脇洞の本尊をそのむきの姿勢にしたがつらぬく2基準線をかんがえと、後者は前者に、52度乃至65度の角度をもってまじわり、当時の技術としてはあたうかぎりの整形をもっていとなまれている。前面に建造物がいとなまれていたことはたしかであるが、それがいかなる構造であったかは、他の洞におけるとおなじく未知數に屬する。ただ斷崖面上に屋根の線をあらわすとおぼしき一聯のこわれをたどると、それが山形をなす點よりして、あるいは方形の屋根かとのうたがいをよびおこす。しかし、これはちよつと想像しにくいことであり、將來なおかんがえなければならぬ。

第十九洞をつくった藝術家と第十八洞をつくった藝術家とのあいだには、おそらくその精神生活において別な世界があったとかんがえられる。調査滯在中にも、しばしばこれら兩洞の優劣が話題となつてとりあげられた。兩者がひとしく彫刻として優秀であることに異論はないが、なにかがちがうということはみなみとめた。しばしばこのちがいは、人のこのみによって優劣論にまでおよんだ。しかし、おもうに兩洞をおなじ尺度で論ずることはできないのではなからうか。

第十九洞では、信仰の中心たる本尊をつくりだすことが最大の目的であつた。そのため洞内を裝飾するものとしては、壁面を充たすのは千佛のみ、あくまで本尊に歸一するごとく設計されたが、第十八洞はちがう。第十八洞も、やはり本尊に中心はある。東西壁および南壁の諸像を引具して南面屹立するごとくであるが、諸像はかなり裝飾的な意圖をもって配置されていることを感ずる。この洞にはいるものは巨大な本尊をあおぎ、そのたくましい脚下にひれ伏し、東西の脇侍にさらに禮拜しなければならぬ。そのとき東北ならびに西北隅のたかいところから、童子にも似た佛弟子たちのなごやかなほほえみを滿身にあびる。第十九洞をおがむときは「きびしさ」を感じ、第十八洞においては「なごみ」を感ずることは否定できない。ただいずれをたかしとするか、それはみるひとのこころによるであらう。

第十七洞はみごとな彌勒菩薩の大交脚像を本尊とする。ただ惜しむらくは、その顔面のひどく破壊していることである。しかし、これも他の洞の本尊、すなわち第十九洞乃至第十八洞の本尊等を参考にすれば、優にそのみごとな面相を復原し、想像することができよう。そうしてみると、それは第十九洞、第十八洞の諸本尊に優るともおとらぬようにおもわれる。この本尊は足の部分をふかく岩盤に掘りさげてつくり、その床はひくくはなはだしくちがっている。

洞内へはつくりだしの段をふんでおりるのである。本洞は、かんがえてみると曇曜五窟中もっとも構造的な様式である。すなわち脇侍のあるいは立ち、あるいはすわっている龕は楣拱龕になっていて、とりわけその装飾のたくましい彫りはまた一種独特なものである。東脇侍はすわり、西脇侍は立ち、本尊の交脚に對して三段構えの變化をみせるなど、この洞はなみなみならぬ周到な營造ぶりをしめしている。なお本尊については、破壊のため、その手の印相が不明であるが、これも他の彌勒菩薩と比較してあきらかにすることができよう。今回はまた、鈴木(義孝)氏の手により、この本尊の足が兩度にわたってつくられたものであることがわかった。すなわちもとの足のうえに、第二の足がつくられていたが、それはみるからに、つたない作であった。さらにまた第十七洞がもたらす問題は、石窟をいとなむにあたり上方より開鑿したか、あるいは下方からしたものかということである。これまた後日あきらかにされるであろう。

第十六洞は、その本尊が曇曜五窟を通じて類例ない特殊なものであり、その年代においても、他の洞といくらがちがうものがかんがえられる。つまり、龍門的な形相にちかいことがしのばれるのである。また平面圖が不整形であることも、その間になにか意味をもっているようにおもわれる。あるいは草創ののち、とりわけはなはだしい破壊があつて、根本的な開鑿のやりなおしがあつたのではあるまいか。そのような臆測もうまれる。そのわりには南壁の諸龕、ならびに東西壁の二佛並座の二龕はすぐれた彫刻技術をしめし、雲岡でも独特のおもむきを有するのは注意すべきである。

第二十洞は南壁がなくなっているため、日光の直射はなはだしく、あまつさえ風がたえずふきすさび、測量にはきわめて條件が悪い。受持の長廣(敏雄)氏の辛苦はいうにいけないものがあつた。それにもかかわらず、短日月のあいだに、ただ光背をのこすのみで、本尊と東西脇侍の測量をおわつたのは幸いであつた。第二十洞の本尊の端正なることは、すでに人の知るごとく、それゆえにまたこの洞の年代その他に關する問題がうまれる。衣紋の彫りのふかくはあるが、わりあい形式化していることなどは、それをものがたる。衣紋の彫りにおいてやや第十七洞の脇侍に似るところがあるとみたのは、あるいは誤りであろうか。

しかし、迫力においては第二十洞は第十七洞におとるとおもわれる。第二十洞の東脇侍は身體のプロポーションがやや悪くて、みる眼に異様にうつることは注意しなければならない。

第三章 實測圖の説明

I 横断面図

本尊臺座の上面，兩足の中央，爪先のやや前線に測量の基準點をおく。すると中央線は門口のまんなかより，やや西にそれていることになる。南壁はだいたい直線であるが，他の三壁は相連続して扁圓形をなしている。北壁中央から本尊の大きな蓮華臺座が突き出し，東西兩壁にもそれぞれ南壁に接して脇佛の蓮華臺座が作り出されているので，空間はきわめて少ない。本尊と左右脇佛の間にはおのおの籐几の座をおき，その上に菩薩立像を刻しているが，右菩薩の下部は破損がとくに甚しいことがわかる。

II 縦断面図（東より）

横断面図にみえる中央線に従って石窟を縦断し，東から眺めたところであるから，門口（下部）と明窓（上部）のそれぞれ西側壁の彫刻があらわれているわけである。門口の彫刻は當初からのものはなく，みな追刻で瘦身長軀の像ばかりである。しかし，上層は下層に比べてよく保存されており，形式もいくらか古いので，上から順次ほられていったのであらうと想像せられる。中程の二佛並坐龕の下に「大茹々…可敦因…」の文字のある銘文がほられている。門口の上部，外壁面に近いところに石を切つたあとがあり，東側と對應しているので，もともと門口を補強するために大きな材木を上にならせたのであらうと思われる。この圖の向って左，すなわち外側は上下にわたって風化が甚しい。

明窓の彫刻もまた追刻で，小規模な佛龕が不規則に作られ，その間に千佛の小龕が一面に刻されている。また中程から下部にかけて大きな龜裂があり，2カ所に木のかすがいがはめられているが，これは開窟當初からの龜裂と考えられる。というのは佛龕がこれを避けて製作されているのが明らかで，また下部には自然の破損箇所方形の石塊を嵌入して補い，それに佛龕をほっているところもみられるからである。

III 縦断面図（西より）

第II圖と對照になるので，門口（下部）と明窓（上部）のそれぞれ東側壁の彫刻があらわされている。北壁から大きな本尊の立像がやや前に傾いてほり出されているため，本尊の額と南壁との間隔はわずか2m餘りしかない。床面に立っては本尊の顔がまともに仰げないのは，當然のこととうなずかれる。門口の彫刻は西側と同じくみな追刻で，下部ほど破損が多い。中央が三段になった複雑な龕は他に類例が少なく，その向って左上の一龕は南壁の角がかけているため斜めに作られているのが異例である。明窓の側壁も西側とほとんど同様に，やはり中央に大きな龜裂があ

るが現在ここにはかすがいははめられていない。

IV 南壁立面圖

南壁を窟内つまり北側からみた圖だから、向って左が東、右が西である。これをみると、まず門口に比べて明窓が遙かに大きく、約4倍もあるということに気がつく。門口はだいたいアーチ形であるが、天井はひどく崩壊している。これに對して明窓は隅取りの方形で、天井の崩壊していることは門口と変りがない。

彫刻は最上層の三角垂飾の繪蓋と、その下にならんだ2層の坐佛列像が、當初から計畫的になったとみられるほかはみな自由に刻されており、従って配置は不規則である。その中でもっとも数の多いのが二佛並坐龕で、交脚菩薩像の龕は2つしかない。その他はすべて千佛であるが、西部最上層には佛龕がなく、同下層には佛龕があって形も大きくなっている。これらはこの窟の開創とほとんど同時の古い彫刻と考えられ、その間にときたまより新しい佛像や佛龕がほりこまれていて、門口天井の東部、千佛のはしにほられた2つの二佛並坐龕のごとき未完成のものもある。門口東西の下部諸龕はもっとも遅れて作られたものと考えられる。

V 東壁立面圖

南北の基準線をもとにして東壁をみたところであるから、東北に本尊の方を向いている左脇佛を南からやや斜めに眺めたかっこうとなる。さらに東北角に立つ菩薩像はいっそう大きな角度で、その南側から眺めたことになるのである。従って、東壁面は大部分を左脇佛が占めているわけで、低い蓮華臺座の上に端然と立つ圓滿な姿は、洞窟内になごやかな雰圍氣を與えている。丸彫りのような深い彫刻で顔が大きく、右手を胸に上げて拇指と人さし指で輪形をつくり、左手は下げて衣のはしを握る。指間には水かきがある。背後に頭光があり、外側から唐草文、坐佛帶となり、中心は蓮華文となっている。頭上には半圓形に突出した天蓋をいただき、その上部の框の中には飛天と化生とを交互に配し、その下に三角垂飾と繪布とを垂らしてある。天蓋の上に二佛並坐龕、さらにその上に3層の坐佛列像があって、天井からの繪蓋に接している。

VI 西壁立面圖

東壁に比べると右脇佛がいくぶん東南に向っているので、基準線からはほとんど正面にみることができる。従って、その豐滿な様子が十分にあらわれており、身長に比べて横巾の廣いことにいまさらのように気がつく。東壁の左脇佛と殆んど同じであるが、こちらは上にあげた右手を開き、指がやや細いのが變つている。なお下半身の破損が甚だしい。上には二佛並坐龕が3つ横にならび、その上に2層の坐佛列像、最上部が繪蓋となっている。

VII 北壁立面圖

中央に16mに近い大佛像が直立して壁面全體にひろがっている。壁面というより、實は殆

んど窟の中いっぱいには満ちているのである。堂々たる巨像で、右肩を脱いで右手を下に垂れ、左手は胸にあげて衣のはしを握る。ただし右手は肱のあたりから下がなくなっている。薄い衣ははだに密着し、階段状になったひだの上には一段ごとに小さい坐佛と化生とが刻してある。手の中に握った衣のはしにもそれがみられる。大部分が坐佛で、化生の列は襟の4條、袖口の2條と手中の10條とである。顔は相當に破損し、ことに鼻がかけ落ちて、今では修理のさいにとりつけた木片がついているが、かつての雄偉な相貌は十分に察することができる。下半身は風化が甚だしく、膝の上部にあたる石質の脆弱なところには切り石をうめて、それに衣紋が刻してある。脚は左右に大きく開き、巨體をささえるにふさわしく安定感があるが、惜しむらくは足先が兩方ともひどくこわれている。

本尊大佛と左右脇佛の間のくぼまったところに、それぞれ籐几の上に立った菩薩像がある。いずれも下半身が風化しているが、右菩薩がとくに甚だしい。左菩薩の上半はわりあいによく残っていて、天衣がゆたかな身體に密着し、胸にあげた左手に蓮の蕾のようなものを握っているのがわかる。頭光は平面的な寶珠形で何も刻されていない(第V圖参照)。本尊の兩脇には左右一對の供養者立像があり、右側ではそのうしろにいま一人の大きな供養者かと思われるものが立つ。左右菩薩の上部に釋迦の十大弟子像が5體づつ本尊の方を向いてあらわされ、その上に供養天の像がやはり5體づつ、さらにその上には侏儒に兩手でささえられた供養者の跪坐像が左右から向かいあっている。そこから上が本尊の頭光であるが、風化がはげしい。頭光の兩側には二佛並坐龕が續き、坐佛の列と繪蓋とを隔てて天井につながるわけである。二佛並坐龕の間には千佛がほられ、すべての間隙をうづめて小佛龕が作られているが、下層部では風化のために詳細がわからない。

VIII

I 縦断面圖(北より)

本尊の足先やや前方の東西基準線によって作った断面圖で、洞窟の大きさとともに内側からみた門口と明窓の配置を示している。明窓が非常に大きく門口の4倍もあること、また左右脇佛の天蓋が意外に突出していることがわかる。

II 天井圖

北、東、西の壁は上に行くほど前に傾いているので、天井の面積は狭く、南壁上部が直線をなすほかは全體として橢圓形に近い。石が崩壊して殆んど何もとどめていないが、南側のふちに飛天の頭部がみられ、北側を除く3方に三角垂飾の一部が残っている。

III 明窓床平面圖

III A 同断面圖

上が明窓の床の平面、下が断面。北側が石質の悪いため非常に破損しているが、南側の風化も相當にひどく、外壁に刻されていたはずの千佛が全く残っていないのもそのためである。

IX

I 北壁本尊佛立像 頭部（西より）

IA 同 （正面）

本尊の顔は下から仰ぐと真正面を向いているようにみえるが、洞窟が上つぽまりになっているため少し前に傾いているのである。顔面は相当損傷を受けている。しかし、丸顔ですべてがのびのびと大きく、目や脣の刻線は端正で、全體として雄渾の中に慈愛の相がみられる。惜しいことに鼻がかけ落ちて、細長い木片がつけてあるのは（この實測圖ではわざと省いた）、頬に泥が残っていることなどから推すと、ある時期にその上から泥を塗って補修したものと思われる。正面像の左肩の衣紋は、2列の連珠文があるのが內衣の襟で、外衣は内側の4列が化生、その他は坐佛である。

X

I 北壁左脇菩薩 上身（西より）

IA 同 （南より）

この菩薩の頭部は非常によく残っている。本尊や兩脇佛に比べて、ほりが平らかなため、全體として鋭さを缺くようである。鼻梁の先端がこわれているのは惜しい。長く垂れ下った耳朶に連珠文の瓔珞が飾られ、その両端に蓮華がついている。頭にかぶった寶冠は正面と左右に圓板を配した三面寶冠で、圓板の間には唐草があり、その下に人字形の連珠文の裝飾がある。正面の圓板は中央が蓮華、つぎが光の旋回文、そのつぎが連珠文で、いちばん外がまた旋回文となる。そのまえに禪定の坐佛があり、圓板の上には三日月形がのっている。左右の圓板の模様は少し簡略であるが、中央から垂れているふさのようなものは、冠が落ちないように頭髪中に突きさす一種の笄のはしについた裝飾であろうと考えられる。

XI

I 西壁右脇佛 頭部（南より）

IA 同 右手（東より）

IB 同 （北より）

洞窟が上部に行くほどつぽまっているので、像全體が少し前かがみになり顔はやや前方下部に向いている。正面からみると頭部が非常に大きく、體もこれに應じて量感にあふれているが、側面からみたところは實に均勢のとれたすばらしい横顔である。もともと衣には朱、顔には白、頭髪には黒、鬚髯の部分には緑の色が施されていたことがわかる。右手は胸まで上げ5本の指を立て、たなそこを外に向けているのでいささか不自然ではあるが、丸味をもったふくよかな手は、この像にふさわしい。指間には水かきがある。

II 東壁左脇佛 頭部（西より）

IIA 同 右手（西より）

IIb 同 (南より)

頭部を殆んど正面、いくぶん南よりからみたところ。西壁の右脇佛と一對をなすので、右脇佛も正面からみればこのような形をしていると思えばよい。豊満な丸顔と、眉梁、鼻、唇などの鋭い線とが、著しい對照をみせながら調和を保っている。右手は拇指と人さし指とで輪をつくり、3本の指を立てているが、惜しくも中指がかけている。指間には大きな水かきがある。

XII

I 北壁本尊佛立像 左手(西より)

IA 同 (南より)

衣のはしを握って胸もとにあてている本尊の大きな手である。衣のはしは拇指と中指とで軽くもち、中指は立て、小指は少し曲げ、薬指を強く折り曲げている。指は1本1本に変化があり、肉づきが豊かで丸々と太く、手だけをみていると健康な子供の手のようである。小指の先と胴との間に装飾的な支柱をはさませているのが横からみえるが、補強のためであることはいうまでもない。指間には水かきがあらわされている。衣のはしは縦のひだになっており、10條のひだにはすべて化生の列が刻してある。化生の列は衣の袖口にもみられる。

II 南壁西部下層 佛立像

南壁西部、門口天井の西部の交脚佛龕と千佛龕との中間に位置する。いわゆるアショカ因縁佛の立像で、龕はなく扁平な圓い光背を負い、分厚い蓮華臺座の上に立つ。この洞窟の本尊と同じように、左手で衣のはしを握って胸にあてているが、右手をさげて鐵鉢のようなものを持っている。1m 餘りの像であるが、量感があって力強い。佛の右側から重なりあって鐵鉢にすがりついている3人の童子のうち、いちばん上にいるのがアショカ王の前身で、食物にみたてた土を佛に奉施している姿であるという。その右側には3人の供養が配され、下には化生のいる樹木があらわされている。

XIII

I 北壁東部 大弟子3(西より)

IA 同 大弟子3(南より)

II 同 大弟子2(西より)

IIA 同 大弟子2(南より)

北壁から東・西壁にかけて、左右菩薩の上部に各5體ずつの比丘形がほられていて、合計10體あるので釋迦の十大弟子と考えられる。いずれも丸彫りに近いような立像で、みな北壁本尊の方向にむいてその説法に聞き入っているがごとくである。菩薩の光背のそばにいるものは全身像があらわされているが、上段背後に立つものの下半身ないし足は初めからなかったのであろう。やはり東部の5體がよく残っていて、西部は風化がはげしく像容を認めがたいものさえある。

大弟子3と稱するのは上段の中央にあるもので、身を前に傾け兩手を胸にして何物かをもっ

ているが、よくわからない。額の髪際に白毫があり、眼はくぼみ頬はこけ、脣をかたく引きしめて、老成した容貌を示し、すこぶる個性的である。耳は大きく長く垂れていて、両肩の上にこれをささえるための臺座が作られている。個性豊かな像であるが、これを十大弟子の誰に比定してよいのか不明である。

大弟子2と稱するのは上段の東端にあって、やはり全身に僧衣をつけ、右手をあげて胸もとにあて、左手は腰のあたりにあてて蓮の蕾を柄のところでやわらかく握っている。額に白毫はなく、頭に肉髻のようなものがあり、弟子像の3に比べて頬もゆたかだし若々しくみえるが、これまた誰にあてるべきかよくわからない。

XIV

I 北壁東部 大弟子4（西より）

IA 同 大弟子4（南より）

上段の西端にあるもので、風化のために顔の下半を欠き身体も殆んどなくなっている。衣のはしを右手にもって胸にあてているが、左手はどのようなであったかよくわからない。額の髪際に白毫があり、容貌はそれほど老けていないが、その名をきめることは不可能である。

II 北壁東部 大弟子5（西より）

IIA 同 大弟子5（南より）

下段の西端にあるが、風化がはげしくただ頭部を残すだけなので、すこぶる異様な感じを受ける。しかも、額の正面には不思議な肉腫のごときものがあり、落ちくぼんだ目をとじ、眉をしめ、こめかみや顎には骨があらわれ、口からは歯がのぞいている。まことに苦難の道をへてきた、老人の形相である。こうした特徴から、これこそ十大弟子のうちでは最年長であったマハー・カシャパ(大伽葉)であろうと推定されている。

III 北壁東部 大弟子1（西より）

IIIA 同 大弟子1（南より）

下段の東部つまり左脇菩薩の光背のそばにあって、蓮華臺座の上に立つ全身があらわされている。頭部は深い丸彫りのようであるが、體のほりは比較的浅く、洞窟の傾斜にしたがって全身を前にのりだしているようにみえる。しかし、足が大きく開いているため安定感がある。肩布と下裳をつけ、右手を胸にあげて唐草を指にはさみ、左手は垂れて中指と薬指とで軽やかに水瓶をさげる。額の髪際には白毫があり、顔つきはやさしく、もっとも若々しいのでアーナンダ(阿難)に比定されている。

THE DRAWINGS OF CAVE XVIII

Of all the caves at Yün-kang the oldest and the most majestic are the Five Caves of T'an-yao. A full-scale survey of these caves was mounted in 1941 during the Fourth Archaeological Expedition to Yün-kang. The responsibility for the mensuration of the Five Caves was divided as follows: Cave XVI, Yoshiaki Shiota; Cave XVII, Yoshitaka Suzuki; Cave XVIII, Seiichi Mizuno; Cave XIX, Masao Kitano; and Cave XX, Toshio Nagahiro. On June 27 of that year the work commenced with the task of establishing a common base line for the Five Caves. On July 1 a base line was established for Cave XVIII, and using it as the standard level, the other surveys were initiated from July 5 on. The drawing up of the floor plan of Cave XVIII was at first carried out by Mizuno with the cooperation of Shiota, and later Mizuno on his own tentatively finished the project on July 14. Continuing the next day, the survey of the walls began at the north and moved to the west and then to the east wall. At the end of August Uichi Okazaki joined the expedition and surveyed the south wall. In early September measurements of the arched entrance and the window began; the window survey was concluded about September 11.

On July 4, 1942, the Fifth Expedition continued the work of the previous year with surveys of the east and south walls. At the end of July Shigeo Tanaka (at that time surnamed Takayanagi) joined the team and worked on the entire face of the north wall, and on August 1 the survey of the Main Standing Buddha finally commenced. The joint work of Mizuno and Tanaka thus continued until September 22 when the survey of Cave XVIII was finished. Collation of the resulting data and drawings began, but each time a problem arose, the area in question was remeasured afresh.

Of the Five Caves of T'an-yao the surveys of Cave XVIII, as well as those of Caves XVI and XX were completed at about the same time in 1942 while those for Caves XVII and XIX were concluded in 1943. The measurements of the Left and Right Attendant Buddhas of Cave XVII, however, were not finished. All of the field drawings were carried back to Japan except for the drawings for Cave XVIII which in the end were put into the hands of Shigeo Tanaka who had cooperated with Mizuno on the survey and who planned to stay on at the site following the Seventh Expedition in 1944. Mizuno, of course, poured his energy into organizing the field drawings and entrusted them to Tanaka expecting that they would be completed perfectly. But unfortunately, the Seventh Expedition in 1944 was the last investigation: during August of the next year the end of the war was upon us.

Amid the chaos at the end of the war Tanaka went back and forth between Yün-kang and Ta-t'ung, and with great difficulty he rescued the original field drawings. On September 1 boarding an evacuation train, he left Ta-t'ung via the Shih-chia-chüang-T'ai-yüan Line. At length on October 4 he found his way to T'ai-yüan, but it was the end of October before he passed through Shih-chia-chüang and came to Feng-t'ai near Peking. There he discovered that the drawings along with his personal baggage were loaded on a freight car which had been left in T'ai-yüan. Returning to T'ai-yüan, he finally located the baggage

THE DRAWINGS OF CAVE XVIII

and the drawings against seemingly impossible odds. By the time he returned to Feng-t'ai it was December 18. When he at last—after overcoming many more obstacles—carried the drawings to Peking, he was denied permission to take them out of the country. Tanaka had no choice but to board a repatriation ship at T'ang-ku and leave the drawings behind.

The drawings were seized by the Chinese government, and we became completely resigned to their loss. In volume 12 of *Yün-kang*, Mizuno and Nagahiro's research report published between 1951 and 1956, the drawings of Cave XVIII were said to have been lost at the end of the war. Scarcely more than a horizontal section drawing was included in the research report.

In 1957 when Mizuno visited Peking with the Japanese Archaeological Delegation headed by the late Yoshito Harada, Kuo Mo-jo, President of the Academy of Sciences, returned the drawings of Cave XVIII to him. It was undoubtedly a moving moment for Mizuno who for more than ten years had not been able to forget the loss of the drawings.

Fourteen years later in 1971 Professor Mizuno died of an illness. During his lifetime these splendid drawings were never published in any form, but now, thanks to the efforts of Mr. Tanaka, they are being published as a supplementary volume to *Yün-kang*. Beginning with President Kuo Mo-jo who, recognizing the value of these investigations, returned the drawings, we are grateful to all the members of the Chinese Academy of Sciences for their kindness. Truly there would be no greater pleasure than if this publication should contribute even in the slightest to academic exchange between Japan and China.

It is now nearly forty years since the first expedition team began its work at Yün-kang. Of those involved in the investigation on the site, except for Mr. Tanaka, I am the only member who is still affiliated with this Research Institute. Therefore it has been my responsibility to prepare the text for this volume.

Takeo HIBINO

Translated by Alfreda MURCK

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
(THE RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANISTIC STUDIES)
KYOTO UNIVERSITY, KYOTO JAPAN, 1975

京都大學人文科學研究所研究報告

「雲岡石窟」續補第十八洞實測圖

印刷 昭和五十年三月二十二日

發行 昭和五十年三月三十一日

京都大學人文科學研究所
京都市左京區北白川東小倉町四七

印刷所 中村印刷株式會社
京都市下京區七條御所ノ内中町50